

ときの輝き

プレ池田市制施行80周年記念イベント 歴史民俗資料館特別展

クレハトリ・アヤハトリ

— 池田に伝わる機織りの伝承 —

《第1回》

今秋、歴史民俗資料館では、池田に伝わる「クレハトリ・アヤハトリ伝承」を紹介する展覧会を行います。1回目は、この伝承の概要について触れます。

◆伝承の概要

『広報いけだ』の表紙に、池田市の市章が記されています。井桁と糸巻きをかたどったもので、市制施行の翌年、昭和15年（1940）に制定されました。同年8月12日告示の「市章制定」によると、「（前略）井桁八染殿井ヲ、糸巻ハ呉織漢織ノ両神ヲ祀ル由緒ノ地タルヲ象徴セシモノナリ」とあり、古くから池田に伝わる「クレハトリ・アヤハトリ伝承」に由来しているのが分かります。

この伝承は、機織り技術の伝来に関するもので、まとめると次のようになります。古代、応神天皇の世に中国の「呉の国」からクレハトリ・アヤハトリの2人が来日し、池田の地で機織りをはじめ、そして、わが国に機織り技術が広まったとするものです。

このとき、2人が上陸した地が「唐船が淵」（新町く木部町の猪名川沿い）といわれています。2人は「染殿井」（満寿美町）の水で糸を染め、「星御門」（または「星の宮」）（建石町）で機を織り、

「絹掛松」（五月山内）で干したとされています。

機織りの技術を教えた2人はこの地で亡くなり、それぞれ「姫室」「梅室」（槻木町く室町）に葬られ、後に、クレハトリは呉服神社（室町）の、アヤハトリは伊居太神社（綾羽2丁目）の祭神として祀られたといわれています。

◆題材は『日本書紀』

この伝承のベースになったとされる話が、『日本書紀』（720年成立）に収録されています。同書には、中国大陸や朝鮮半島から、土木をはじめとするさまざまな技術が日本にもたらされたことと記されています。機織りの技術もその一つです。

応神天皇37年2月、勅命により、阿知使主と都加使主が縫工女を求めて呉に遣わされます。呉の王から兄媛・弟媛・呉織・穴織の4人の女性を与えられた彼らは41年2月に帰国し、「津国」に至り、武庫（現在の兵庫県）に帰ってきたと記されています。

このうちの「呉織・穴織」が、先に登場したクレハトリ・アヤハトリだとされています。ちなみに雄略天皇14年正月にも縫工女渡来について、類似した内容の記載がみられます。

◆注目すべき物語性

全国には機織りに関するさまざまな伝承が残っています。なかには、池田と似たものもあります。たとえば、西宮市の松原町には、クレハトリ・アヤハトリが糸を染めたといわれる「染殿池」が残っており、周辺に「津門呉羽町」「津門綾羽町」などの地名があります。

奈良県川西町にある糸井神社は、祭神としてクレハトリ・アヤハトリが祀られており、この地で機織りを行ったとされています。また、富山市には「呉羽」という地名があり、同地の姉倉比売神社の祭神も、地元の

人びとに機織りを教えたとされています。

池田に残る「クレハトリ・アヤハトリ伝承」は、伝承地の存在も含め、とくに物語性のあるものと考えられます。

ところで、先の『日本書紀』には「呉織・穴織」が、池田に到着したとは一切出てきません。それではなぜ、池田でこの伝承が成立したのでしょうか。次回は、この点を中心に、これまでの諸説を紹介します。

◆問い合わせは歴史民俗資料館
（☎751・3019）



▲「摂津名所図会」の挿絵（歴史民俗資料館蔵）